



ゆるい
エピソード

hirotsugu ko

前編

※この物語は、人づてで伺った実話に基づいて書いておりましたが、あくまでフィクションですので、ご了承ください。

私の記憶が確かなら、私の友人の知り合いに巷で有名な派遣社員がいて、山田くん（仮名）と言った…

この話は、そんな彼の面白いエピソードを書き綴ったものである…

山田は、とあるアウトソーシングの正社員で、技能者として、大手メーカーの工場に出向していたそうだ。そして、彼は、ローテーション勤務にて、夜勤をしていたらしい…

「夜は、人が少ないから静かでいいけど、眠くて仕方がないぜ」

山田の同僚である川畑（仮名）が、そう言うと、

「そりゃ、昼間にちゃんと寝ないでパチンコばかりしているからだろ…そんなんじゃ、朝まで持たないぜ」

山田は、そうたしなめた。

「今日は、ずっと連ちゃんしたんだからしょうがないだろ…おかげで、10万も儲かったしな…」

「マジかよ…だったら、今度の休みの時に何かおごれよ！」

「そりゃ、難しい注文だな…自分の金は、自分で稼ぎな」

「くっそう…最近、俺は飲まれてばかりなんだぞ。少しぐらい、恵んでくれよ！」

二人は、そんな他愛もない会話をしながら、半導体の製造装置を操作していたそうだ。

「よし、これでプログラムは終了だ。あとは、窯が開くまで休憩しようぜ…」

当直のリーダーが、そう言うと、

「待っていました…これで、ようやく睡眠が取れる！」

川畑は、万歳をして、椅子を並べて寝床の準備をしたのだった。

「じゃあ、俺は、外の点検に行ってくるよ」

「まじめだな、お前は…」

「当番だから仕方ないさ」

山田は、施設の製造装置の点検をするため、クリーンルームから出たのだった。

「特に問題はなしと…」

外回りを終えた山田は、設備に問題がないことを確認すると、ウエハの製造の仕事に戻るため、クリーンルームへ向かったそうだ。そして、屋内に入った時、大地を揺るがすかのようなサイレンが、辺りに鳴り響いていたのだった。

「な、なんだ!？」

突然のできごとに山田が、慌てふためいていると、クリーンルームから当直のメンバたちが、

息を切らしながら飛び出してきた。

「火災報知器が作動している…早く、逃げるぞ！」

リーダーに、そう言われた山田は、彼らと共に屋外へ避難したのであった。

「みんな、大丈夫か？」

リーダーが、そう言ってメンバを確認すると、

「おい、川畑はどうした？」

その場に川畑がいないことに気付いた。

「そういや、今日はパーラーに入り浸りで寝てないって言っていたな。まさか…」

山田は、思わずはっとすると、

「サイレンの音に気付かないで寝ていると言うのか！」

リーダーは、すぐに血相を変え、

「いかん…このままでは、奴は火に巻かれるか、毒ガスを吸って中毒死をするかもしれんぞ。

早く、助けに行かないと…」

急いで、クリーンルーム内へ戻ろうとした。

「危険ですよ、先輩…それこそ、ミイラ取りがミイラになる…」

「馬鹿野郎…一緒に仕事をしている仲間を見捨てるわけにいくか！」

他のメンバの一人の声に、リーダーは一喝をしたのだった。すると、

「わかりました。川畑は、俺の友人だから、俺も行きますよ…」

山田と他のメンバも覚悟を決めたのであった。そして、彼らは、すぐに防護マスクを装着すると、クリーンルームの出入り口に集結したのだった。

「ここから見る限り、火の手は上がっていないようだな…」

リーダーは、そう言って、メンバを見渡すと、彼ら小さく頷いた。

「いざ、突入！」

当直のメンバたちは、一斉に突入すると、川畑の姿を必死に探したのであった。

「ええい、うるさい！」

メンバの一人が、耳障りな火災報知器のサイレンを消すと、

「どうか無事でいてくれ。川畑…」

山田は、祈るような思いで、クリーンルーム内を駆け回った。そして、彼は、製造装置の前で椅子を並べて眠っている川畑を見つけたのだった。

「川畑！」

彼は、川畑を強く揺すって、意識の有無を確認した。すると、

「ふああ…どうした？」

彼は、目をこすりながら、ゆっくりと目を覚ましたのであった。どうやら、火災もガスの流出もなく、火災報知器の誤動作だったようだ。それを見た山田は、

「お前、火災報知器が鳴っていたんだぞ。気付かなかったのかよ？」

と、聞くと、

「えっ…マジで！」

川畑は、この時になって仰天したそうだ。それを見た山田は、あまりのことに空いた口が塞が

らなかったと言う…

後編

私の記憶が確かなら、山田くんに纏わる話はもう一つあるのだ…

ある日、山田くんは、非番だったため、自宅でのんびりとくつろいでいたそう。

「今日は、台風か…しかし、よく降るな…」

山田は、窓から外の景色を眺めながら、そう口にした。と、その時、彼の携帯電話が激しく鳴ったのだった。

「奴か…」

彼は、電話をかけて来た人物が川畑であることを確認すると、おもむろにため息をついた。最近の川畑は、仕事でよくミスをするため、それが原因で少しノイローゼになっていたからだった。

「もしもし…」

山田が、その電話に出ると、

「川畑ですけど…」

同じく非番だった川畑は、そう答えた。

「こんな時間にどうしたんだ？」

山田が、そう尋ねると、

「俺、自殺しようと思っているんだ…」

川畑は、衝撃的な発言をしたのだった。

「お前、何をバカなことを言っているんだ。ちょっと、仕事でミスしてリーダーに怒られたからと言って、何も死ぬことはないだろ…」

「いや、俺はもう限界なんだ。生きていても仕方がない…」

川畑は、そう言うと、

「今、俺は、〇〇山の山中にいる…」

「えっ…マジで！」

職場で気が弱くなった姿を目の当たりにしていた山田は、だんだん彼の話を信じ始め、

「俺は、ここで首を吊るから、お前は俺の亡骸を回収してくれ。頼む…」

それを聞いて、血相を変えたのだった。

「おい、早まったことをするな…今から、俺も現地へ向かうから、そこで大人しく待っている！」

山田は、電話を切ると、急いで車に乗り込んだのだった。

「こうなったら、何が何でも説得して、自殺を止めてやるぜ。絶対死ぬんじゃねえぞ、川畑…」

山田は、そう口走りながら、ギアをチェンジした。そして、荒れ狂う台風の中を、果敢に走らせたのだった。

「くおっ…やべえ！」

彼は、自然の猛威の中で必死に格闘をしたのだった。フロントガラスは、大雨のせいでワイパーを最大にしてもぼやけ、車体は強風のため、たびたび煽られてスピンをしそうになったが、彼は友人を助けるために、その恐怖を掻き消しながら、山中の道を走り続けたのであった。

「よし…着いたぞ！」

山田は、急ブレーキをかけると、びしょ濡れになることに気を留めることなく、ドアを開けて辺りを見渡した。だが、そこには、川畑の姿も彼の車の姿もなく、ただ激しい風雨の音だけが、鳴り響いていたのだった。

「おかしいな…」

彼が、そう不審に思った時、ふいに携帯電話が鳴った。

「むう、奴からだ…」

彼は、その電話に出ると、

「さっきまで、そこに居たんだが、暇を持て余しちゃってな…」

川畑は、とある場所へ移動したから、そこへ来て欲しいと言う…それを聞いた彼は、大きく項垂れながら、彼のいる場所へ向かったのであった。

チャンチャン…

ジャラジャラ…

びしょ濡れのボロ雑巾状態となった彼が、へろへろになりながらパーラーへたどり着くと、川畑はドル箱を積んでタバコをふかしていたのだった。

「よう、今日は絶好調だぜ…見ろよ、この出玉！」

彼は、満面の笑みで、今日の成績を見せると、

「あ、あのな…」

山田は、肩を震わせて青筋を立てた。そして、

「たわけか、わりや…人が、どれだけ心配したと思っているのじゃあ！」

川畑の首を絞めて揺すった。

「ぐええ…す、すまん…ほんとにすまんかった…」

「その気持ちがあるなら、今日の儲かった分をこっちにも分けやがれ…このロクデナシが！！！」

その後、彼らの友情は、より強まったそうな…

めでたし、めでたし…

おまけ1

私の記憶が確かなら、山田くんに纏わる、こんな過去の話があったのだ…

山田は、小学生の頃のトラウマを今でも引きずっていた…

そう…あれは、放課後の出来事…

「おい、何気にアップルパイがあるぜ…」

とあるスポーツクラブの活動から帰って来た山田とその友人たちが、自分たちの教室のとある女子の机の上に、どや顔でのさばっている焼き菓子を見つけて群がった。

「料理クラブに入っているクラスの女子たちが作ったんだぜ…きっと」

「自分たちが作ったって、アピールしたいんだろうな。生意気な…」

「そんなに自分たちは、できる女って思われたいのかつうの！」

その香ばしく、綺麗に焼き上がった芸術品に山田の連れどもは、もしかしたら嫉妬のような感情を抱いたのかも知れない…

「そこまで見せびらかしたいのだったら、味の方も相当自信があるんだろうな。だったら、俺たちが評価してやろうぜ」

その友人の言葉に、

「待て待て…勝手に食っちゃったら、後がやばいぜ」

山田は、彼らを制しようとしたが、

「うるせえ、こんな所へ置きっぱなしにしている方が悪いんだ」

「その通りだな。そもそも、ここへ置いてどっかへ行くってことは、食いたけりや食えって言っているもんだぜ」

と、総スカンされた挙句、皆と一緒にあって、美味しそうなアップルパイを平らげてしまったのだった…

その後、何も知らない女子たちは、自分たちの作った傑作が消え失せてしまったことに、当然の如く腹を立て、毅然とした態度で山田たちと対峙したのだった。

「他の子（料理クラブでない女子）たちに声を掛けて、一緒に食べようとしたのに」

料理クラブの女子たちの一人が、たまらず泣き出すと、

「もう、これは犯罪だわ…人の物を、勝手に食べるなんて！」

別の女子が、論理的に攻め、

「責任を取れ、このバカ男子！」

また別の気の強い女子が、怒りの抗議を発した。

「やかましい…アップルパイの一つくらいで、ガタガタぬかすな！」

山田の友人の一人が、逆ギレすると、

「何て、憎ったらしい…デリカシーのかけらもあったもんじゃないわね、このジャイアニズムどもめ！」

女子たちは、感情をむき出しにして、彼らと喧嘩をおっぱじめたのであった。と、その時、「お前ら、何をやっているんだ！」

見回りに来た担任の先生が、とっさに非常事態に反応して割り込んで来たのだった…

そして、事情を聞いた担任は、額をコリコリとかきながら、「お前ら、やって良いことと悪いことがあるだろうが！」

山田たちをガン見すると、「すみませんでした…」

彼らは、バツの悪そうに頭を垂れた。それを見て担任は、大きくため息を付き、「まあ、こんな結果になったが、彼らは大いに反省している。腹立だしい気持ちは分かるが、今回だけは許してやってくれないか」

彼女たちに、彼らの弁護をしようとする、その様子にカチンときた山田が、おもむろに口を開いた。

「先生…俺たちにも男の意地があるってもんだ。だから、俺たちに、彼女らへお詫びをさせてくれ」

その言葉に、先生は、「お詫びだと…一体、どうお詫びをするつもりだ」

山田を問い詰めると、「俺たちが、彼女たちのためにアップルパイを作ります…」

彼は、小さく、そう応えたのだった。その答えに、女子たちはあつけに取られたが、「…そうか。分かった、俺から家庭科の先生に頼んで、家庭科室を使えるよう頼んでみる」

その意を汲んだ担任は、大きく頷いたのだった。

かくして、山田たちは、近くのスーパーマーケットで材料を仕入れた後、家庭科室でアップルパイを作り始めたのであった。

「ふん…アップルパイごときなんざ、俺たちにかかればイチコロだぜ」

捻くれ方やの山田が、名誉挽回の野望の炎を燃やすと、「ああ、女子なんかに負けてたまるかよ」

彼の仲間たちが、頼もしい言葉で返したのだった…ところが、「捏ねても捏ねても、生地になんねえぞ。どうなっているんだ！」

びしゃびしゃの粉水を何とか成型しようとするザマがありつつ、それでも長時間をかけて生地にしたが、

「こいつを丸く伸ばすんだっけ」

「とりあえず、リンゴを上に乗っければいいんだよな」

「焼け…、とにかく焼いちまえ！」

各自が思うがままに作った結果、

「こんなだっけ、アップルパイって…」

何とも奇妙な物体を生み出してしまったのであった。何故なら、生地と生地の上にバターを挟んで無い…どころではなく、一枚の生地で焼き上げたのが原因であることは、言うまでもない…

「こんなぺったんこのアップルパイは、初めて見たぜ」

「何で膨らんで無いんだよ…まるで、ピザみたいじゃねえか」

「わははは…リンゴのピザって、超うけるんですけど！」

出来上がったリンゴピザを見て、山田たちが大笑いすると、

「おい、おい…やばいぜ、こんなの洒落になんないじゃないか」

その力作を見て、山田は天を仰いだのだった…

その後、山田たちは、精一杯の作り笑いで、教室で待つ先生や女子たちに、それを持って行った。だが、案の定、女子たちは完全にキレて帰ってしまうし、先生から大目玉を食らうしで、散々な結果となったことは言うまでもない…

この屈辱、必ず晴らしてやる…

意外にも山田は、妙なところで執念深い男だった…

そして、ええ感じで、月日は流れた…

「まあ、あの時は“タルト”って言葉が無かったからな…」

山田が、そうぼやくと、

「で…旨いもん食わしてやるからって来てみたら、この俺に毒味しろってか…」

川畑は、目の前にある山田の作ったリンゴのピザを見て、おもむろに青筋を立てた。

「今回は、マジで自信作だ。俺が作ったんだから、不味いわげがない…そう思うだろ」

「だから、何で俺が実験台にならねえといけないんじゃあ！」

「“実験台”って、どう言う意味だ。幼少の時から、努力を重ねた集大成なんだぞ！」

「知るか。この件に関して、完全に俺は部外者だろうが！」

こうして、どうしても誰かにリベンジしたかった山田だったが、その夢は儚くも散ったのだった…ピザとタルトは大違いだぞ、山田くん…がんばれ！

おまけ2

たまに、若かりし頃に自分で作った料理が、無性に懐かしく思える時がある…

無論、パチスロか競馬で散々すった挙句、とうとう金が底ついたため、次の給料日が来るまで、ひたすらネコマンマを食い続けたとか、食パンだけで1週間持たせた等と言う話ではなく、“ありきたりの料理に飽きたから、俺が新メニューを開発してやるぜ”と言う野心に駆られて無理やり作った料理のことだ。

私の記憶が確かなら、その昔、山田くんは、こんな料理を作った経験があるのだ…

深夜残業でへとへの山田は、自宅に帰るやいなや台所の戸棚を物色した。

「ちっ、海苔を切らしていたか…今日は、あんまり食欲わかねえから、おにぎりぐらいで済ませたかったんだがな…」

彼は、大きくため息をつくと、

「まあ、どうせ明日も仕事だし、つなぎで何か食えればいいか」

ブツブツと文句を言いながら、冷蔵庫の調査を始めた。すると、前の休日で買ったためていたキャベツ一玉が、その存在感をアピールするが如く、目に飛び込んできた。

「キャベツでもかじっておくか。胃に良いしょ…」

と、その時、彼の脳裏に何かが過ぎったのであった。

まてよ…このキャベツの一枚葉を塩茹でにすれば、海苔みたいになるんじゃないかねえの？

この瞬間、彼の新メニューの一品が誕生したのだった。その名も“キャベツおにぎり”だ。

「キャベツの葉がしんなりとして海苔みたいに巻けるし、ちょっと薄味だが醤油をかけて食べれば、意外といけるもんだな…」

彼は、その奇妙な物体をほうばりながら、

「色々やってみるもんだな。何だか、面白くなってきたぞ」

新メニューの研究に興味を抱いていったのだった。

次の休日…山田は、早くからスーパーに入り浸り、目を皿のようにしながら、そこへ居並ぶ食材たちを丁寧に選定していったのであった。

「秋刀魚と長芋をゲットしてやったぜ」

安値で手に入った食材をビニール袋一杯に詰め込むと、彼は意気揚々と一人暮らしのアパートへ凱旋した。

「今日のテーマは、アメリカンだ。この和食材と俺の頭脳で、びっくり大仰天な料理を作ってやるぜ」

そして、台所に立ち、気合を入れ直した彼は、怒涛の如く調理を始めた…

「目指せ、“料理の鉄人”！？」

他愛もないことをほざきながら、秋刀魚を魚焼き器に投入した後、彼は長芋の皮を剥いて、それをスライスし、醤油味ベースでソテーしたのだった。

「何となく、ポテトチップスみたいになったな」

香ばしい匂いを放ち、良い加減で焼き上がった長芋スライスのソテーを見て、にんまりと笑みをこぼした。

「あとは、和風ホットドックだぜ」

そう口にする、彼は焼き上がった秋刀魚をまな板に置き、骨から身を丁寧に取り外していった。

「秋刀魚の身って、意外とボロボロになることなく、固まりとして剥がせるもんだな…」

妙に感心しながら、それをホットドック用の長細いパンに刻んだキャベツと一緒に挟むと、彼は薬味として買った生姜を擦りおろして、それを載せ、さっと醤油をかけて、

「完成です！」

力強く両手の拳を突き上げたのだった…と、その刹那のタイミングでインターホンが景気良く鳴った。

「何だこれは、お前が作ったのか」

川畑は、山田の部屋に入るやいなや、それを見て、あっけにとられると、

「丁度いいところで来たもんだ。折角だから、試食会と行こうぜ！」

彼は、自信満々で、オリジナル・アメリカンを川畑に勧めたのだった。

「うおっ。なかなかいけるぞ、この秋刀魚のホットドック。魚好きの俺にとっては、この食べ方は大ありだぜ」

和風ホットドックをほうばった彼は、妙にしっくりくるヘルシーな味に驚かされた。

「それに、この山芋もホクホクして旨い！」

彼の称賛の声を聞いて、“我が人生に悔いはなし”と悟った山田は、

「星、何個頂けるのでしょうか」

と、鼻を膨らませながら大きく胸を張ると、

「おう、勿論3つだ。3つ！」

これとばかりに、川畑は有無を言わず、“よいしょ”で持ち上げたのだった。

「俄然、やる気MAX！」

随分と気を良くして有頂天となった山田は、言うまでも無く、この世界にどんどんとのめり込んでいった…

その後、山田は、オリジナル料理を考案しては、友人の川畑を呼び寄せたのだった。

「今日は、何の飯やねん」

顔を引きつらせながら、川畑がそう言うと、

「驚くなよ。今日は、インスタントラーメンの新しい食べ方として、汁無しインスタントラーメンのまぶし飯を提案する」

と、笑いながら彼は答えると、食卓の上にどんと置いた。

「湯がいたインスタント麺に、ラーメンの素（粉末）を絡めて、それを飯の上に乗つけた訳だな」

「まさに、その通り！」

その曲がった根性の無い言葉に、川畑は大きくため息をついた。

「この前は缶詰のシーチキンで焼き飯、その前はレトルト食品のクリームシチューであんかけスパゲティー、さらにその前は永谷園の麻婆春雨であんかけ冷奴か…」

と、心の奥底で吐き捨てると、

「結局、俺はただの“実験台”かい！」

彼は、沸き上がる本音と共に、汁無しインスタントラーメンのまぶし飯を、迷うことなく呑み込んだのであった…

おまけ3

私の記憶が確かなら、彼らにこんなエピソードがあったそうさ…

ゴールデンウィーク明け、山田の勤める工場で、同僚でもあり友人でもある川畑が唐突に、こう尋ねてきた。

「今年のゴールデンウィーク、何をしていた？」

その質問に、

「ずっと仕事だったじゃねえか。お前と一緒にさ…」

山田は、あきれた顔をしてため息をついた。本来なら、工場は休みとなって長期休暇に入るはずだったのだが、お得意様の納期に間に合わせるべく、交代勤務でフル稼働するハメとなったからだ。すると、

「そうは言っても、四六時中働いていたわけじゃねえだろう…仕事が終わったら、プライベートな時間があるだろうが。俺は、それを聞いているんだ！」

川畑は、そう言って、顎を突き出した。

「あのなあ…連日、仕事が終わった後は、お前と一緒に飲みへ行っているだろうが。もう、忘れたのか？」

「あれ、そうだった？」

しかめ面をする山田に、川畑はとぼけた顔をして見せた。と、それを見て、彼はふいに小さく吹き出した。

「だが、昨日の店は傑作だったな…トイレのドアが急に開かなくなって、お前がそこへ閉じ込められてよ。その焦っているところが、マジでうけるつつうの！」

「馬鹿野郎…あの時は、ほんとにどうしようかって思ったんだぜ。まあ、お前が外から蹴破ってくれたんで、助かったんだけどさ」

その話で川畑がむくれると、

「そんでもって、その後ビリヤードをしようと言う話になってよ。これがまた傑作なんだよな…」

山田は、笑いながら続けた。

「どんな風になったんだけ。記憶無くすぐらい酔いつぶれていたからな…」

「そう…お互いベロンベロンに酔っ払っているもんだから、いつまで経っても、面白いように球がポケットに入らないんだよ。ナインボールを1ゲームするのに1時間以上かかったんだぜ」

「そう言えば、なかなか終わらんなあとは思っていたが、そんなに時間がかかっていたのか。後で聞いて、びっくりとはこのことだぜ」

川畑は、それを聞いて、思わず苦笑いをした。そして、

「で、その後、カラオケに行ったんだけど…どうやら、覚えてなさそうだな」

「ああ…もはや、何をしたんだか、さっぱり…」

頬をコリコリとかき、

「俺が“西条秀樹”の“ヤングマン”を歌っている時に、お前が急に服を脱いで踊り出してよ…
しかも、“YMCA”の“C”が逆になっているから、ほんと大爆笑ものだぜ。ぎやははは！」
「マジかよ…。うわあ、最悪！」

それを耳にして、顔を赤くしながら、頭を抱えて天井を見上げたのだった。

「そのおかげで、日頃のうっぷんは完全に消え失せたって感じだけだな」

「俺は、めっちゃめっちゃ自己嫌悪に陥っているんですけど…しかも、ひどい二日酔いでダブルパンチものだぜ」

山田のさわやかな顔に、川畑はげんなりとした顔になったが、

「だが、一つだけ…これだけは、言えるぜ」

そう言って、おもむろに真面目な顔を作った。そして、

「別にゴールデンウィークじゃなくてもできることだな…」

「確かに…」

その言葉に、二人は互いに見合わせて、深くため息をついたのだった。

おしまい…